

グローバル・スコープ

7月27日、朝鮮戦争休戦協定から70周年を迎え、北朝鮮は金正恩総書記がロシアのショイグ国防相、中国の李鴻忠共産党政治局員とともに軍事パレードに参列する姿を外国に配信した。ロシアは朝鮮戦争に参戦したわけではなく、協定の署名当事者でもないが、中国とロシア、北朝鮮の連携を前面に出した形となった。韓国に保守政権が成立し、日韓関係の修復が行われ、日米韓の連携も強化されていく情勢の変化に対応して、北朝鮮も中口との連携を示したかった

朝鮮戦争休戦70年の東アジア



のだろう。
東アジアにおける日米韓対中口北朝鮮のブロック対立は好ましい
北朝鮮の金正恩総書記とロシアのショイグ国防相（EPA＝時事）

ことではない。北朝鮮がミサイル実験を繰り返しているだけに、もっぱら軍事的対立関係が強調されることになる。軍事的緊張のみに目を奪われることなく、国際関係の実相を理解することが重要だ。
東アジア地域に長く影を落とすことになるのは米中対立だ。しかし、米中は軍事面の対立という単純な関係にあるわけではない。対立・競争・共存・協力という重層的かつベクトルの異なる複雑な関係にあることを理解しよう。政

日米韓、対中強化など連携を

治制度としては「民主主義統治と専制的統治」という競争だし、経済的には相互依存関係を無視できない共存関係であり、また地球温暖化対策などは協力関係にならざるを得ない。今後とも米中関係はそれぞれの国内情勢の推移に応じ対立や競争の面が強調されたり、相互依存やグローバルな協力の面が着目されたりするのだろう。

中国がロシアのウクライナ侵略を非難する国連決議を棄権し、北朝鮮は反対票を投じたところに今日の国際関係の実相がある。すなわち、中国にとってロシアの行動は建前として容認できない「主権侵害」であり、ロシアの行動には反対と考えるのだろう。同時に米中対立という観点からは反対と考えるのだろう。北朝鮮の核を切り捨てるわけにはいかないが、軍事的協力を行うことにより経済制裁を受けるわけにもいかない、という複雑な思いがあるのだろう。北朝鮮にしてみればロシアとの連携は孤立を防ぐ重要な要素である。



日本総合研究所
国際戦略研究所
特別顧問

田中均

が、一方、北朝鮮が核兵器を保有することには反対と考えているのだろう。北朝鮮の核が認知されれば、韓国や台湾、そして日本にも核保有の「ドミノ」が起りかねない。ここに北朝鮮問題は東アジア情勢を転換していくカギとなる要素がある。日米韓は中国に対する働きかけを強化し、朝鮮半島の非核化について連携することが、実は米中対立を緩和することになる点にも着目すべきだ。
（第2・4水曜日に掲載）